



大決壊!
TS俺が
女の子のレックスン!?

♠♥1章目 いきなり女の子になって!?

P4



♠♥2章目 ブルマでおもらし!

P35



♠♥3章目 鼠のわざとおもらし!

P75



♠♥4章目 晶の心開オナニー！

P103



♠♥5章目 スクール水着で溶けあって！

P154



♠♥6章目 押し倒されて——。恋人宣言！

P220



♠♥エピローグ 変わっていく日々

P263

♠♥晶の公開オナニー

「くっ、くうう……っ、止まらな、い……！ ダメ、これ以上
イッ、イイイッ、イッちゃうと……あッアアン！」

ぷしゅっ！

しゅわわわわわわわわわわわわわわわわ！

それは、突然噴き出してきた。

くぐもった水音が鳴り響くと、サラリとした黄金水が噴き出して
きたのだ。

その勢いたるや、クロッチと黒タイツという三重の障壁を突き
破って噴き出して来るほどだった。

シュイイイイイイイイイイイイ！

もわっ、もわわっ。

女の子の尿道は、太く、短い。

それに膣口のすぐ脇に尿道が通っているから、快楽を得ようとす
るとどうしても刺激されてしまう。

だから尿意がこみ上げてくるのは当然のことなのだろうけど……
その様子を目の当たりにした司は、晶の股間に視線が釘付けになっ
ていた。

「女の子って、こんなに激しく絶頂するのか……!？」

こうして目の当たりにすると、その激しさに信じられなくなって
しまう。

男はちんこを痙攣させて射精すればそれでお終いだけど、女の子
の絶頂はまさに全身を使っていた。

それに失禁までして絶頂を極めているだなんて。

男は、こんなに激しく絶頂しない。

「んっ、ふうっ！　ううっ！　イッ、イッちゃう……！　ま
だ……ああん！　イッ、いぐ！」

キュンッ！　キュンッ！
プシャア……、プッシャアアアアアアアア！

晶のクレヴァスがうねるたびに黄金水や本気汁が溢れ出してきて
いる。

ツーンとしたアンモニア臭が浴室に満たされ、その恥臭さえも晶
にとっては官能のスパイスとなっているのだろうか？

「くっ、くうっ」

がくっがくっ！　がくんっ！
ぷっしゅうう……ぷっしゃああああ……!!

晶は尻餅をついてM字に開脚させるという恥ずかしいポーズのままで、腰にバネが仕掛けられているかのように痙攣させている。

その痙攣のたびにクレヴァスからは淫汁や小水が噴き出して、大きな水たまりとなって広がっていった。

「んっっ、ふうっ！ うっぐう……っ、まだ、まだ……イッッ、イッちゃう……うっ！」

しゅわわわわわわっ！

じゅぷぷっ！　じゅももももももも！

失禁しながらも、晶は欲望を貪るかのように、自らのクレヴァスの深いところにまで指を食い込ませていく。

晶の頬は紅潮し、官能に弛緩していた。

それでも股間からは熱いヨダレが溢れ出してきていて、見る者の理性を溶かそうとしてきているようでもあった。

(こんなに……激しいなんて……)

司は絶句してしまう。

普段は無表情で、氷のようにクールな幼なじみに、こんなにも情熱的な一面があったなんて。

スカートのなかに、本能のままにうねる器官が隠されていたなんて。

(俺も、こんなに激しくイク……のか!?)



それは、にわかには信じがたい現実だった。

もしもこんなにも激しくクレヴァスをうねらせて、ドロドロの体液を分泌し、更には失禁しながら絶頂したら、気絶してしまうに違いなかった。

それに腰もバネのように痙攣している。

それも一度だけではない。

何度も。

何度も、だ。

男は射精すれば絶頂が終わるけど、女の子はザーメンのすべてを受け止めなくてはいけないから、それだけ絶頂が長く続くということなのだろう。

「ひっ、ひい……っ」

女の子座りして晶の絶頂に見入っていた司は、驚愕のあまりに後ろにひっくり返りそうになって――尻餅をついていた。

ぺったりとお尻をついている床が、妙に冷たく感じられる。

意図せずに、無防備に足を開いてしまっていた。

むわっ、むわわ……っ。

司のスカートが捲れ上がって、水色と白のしましまショーツが丸見えになっている。

そのクロッチは既に濡れそぼり、おまたに食い込んでヒクヒクと痙攣していた。

「あっあぁあぁ……」

気がつけば――、
じゅわっとおまたが生温かくなって、お尻のほうにまで広がっている。

しゅいieiieiieiieiieiieiieiieiieiiei……。

司は、恥ずかしい水音を立てながら失禁していた。
それは司自身も気づかないうちに。
おしっこの温もりにおまたも、お尻も溶かされていき、ただでさえ弛緩しているおまたが更に弛緩していく。

しゅわわわわわわわわわわわわわわわわわわ……。

「あっ、あぁあっ」

ヒクンッ、ヒククンッ。

しゅいieiieiieiieiieiieiieiieiieiiei……っ、しゅわわわわわわわわわわわわわわ……っ。

頼りなくヒクヒクと痙攣する司のおまたからはおしっこが漏れ出してくるまで、お尻を中心として大きな水たまりが広がりがつた。

「あぁ……司ったら、私のえっちなところを見ておもらししてしまっただの？」

「えっ？ ええ？」

晶に指摘されて、このときになって司は自らが失禁していることに気づいた。

ただどどんなおまたに力を入れても、一度漏れ出してきたおしっこを止めることはできない。

ただでさえ、女性器に慣れていないのだ。

尻餅をついて、ただ小水を垂れ流すより他ない。

「ぁぁっ、そんな。小便漏らすなんて……っ」

キュンッ！ キュウウッ！
しゅわわわわわわわわわ……。

どどんなおまたに力を入れても、おしっこは漏れ出してきたいて、ツーンとしたアンモニアの湯気を上げている。

そんな司を見て、

「ごめん、司。我慢できない」

「えっ？」

突如、晶からの謝罪。

一体何故？

首をかしげようとした、その瞬間だった。

「あっ」

司の短い悲鳴。

その瞬間、司はなにもできなかった。

なにしろ晶が抱きついてきたかと思ったら、ギュッと抱きしめられていたのだから。

大胆にも両手両脚を巻き付けてきて、だいしゅきホールドになっていた。

意図せずに、対面座位になっている。

「晶の身体、熱くなってる……っ」

「うん。知ってる」

晶の身体は、とろけそうなほどにしっとり熱くなっていた。

それにビクッ、ビククッ！ いまだ絶頂が収まらないのか、全身を使って痙攣している。

「司が可愛すぎるのがいけないんだから」

耳元で囁きかけられる。

制服越しだというのに、二人の身体が溶けあっているかのような、そんな錯覚。

「ごめんなさい。先に謝っておく」

ぶるるっ。

それでも二人はお互いの身体を密着させるように抱きしめ合っていた。

お互いの熱が引くまで、ギュッと……。

体験版はここまでです！

ここまで読んでくれてありがとうございました！

次ページから、既刊のイラストを掲載したいと思います。

楽しんでもらえたら嬉しいです！



大決壊シリーズ
各種 DLsite で配信中



